

父親の養育態度の世代間伝達に関する事例研究

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター

近年、児童虐待やドメスティックバイオレンス（以下 DV）などの、家庭内でのネガティブな現象が世間で取りざたされている。そしてそのようなネガティブな現象は親から子どもへと伝達されることが多いとされ、親の未解決の葛藤が知らぬ間に子どもに伝わることを世代間伝達（渡辺；2000）と言う。世代間伝達はこれまでの研究において母子関係の問題として取り上げられることが多く、わが国でも母親の養育態度や愛着との関連（数井，2000；今野，2001）が示唆されている。筆者も卒業論文において、母親から受けた養育と将来自分が子どもに行う養育の伝達の有無を大学生の男女を対象に調査したところ、女性は養育態度が世代間で伝達しやすく、男性は女性に比べて、母親から受けたネガティブな養育を将来回避するという結果を得た。

なぜ父親はネガティブな養育を回避するのか。このメカニズムを探る事が出来れば、近年問題になっている世代間伝達になんらかの解決策を見出すきっかけになるのではないか。しかし、わが国における父親の養育態度をテーマとした研究は、母親の育児ストレスとの関連をみるものや、育児行動の分析にとどまっていることが多く、養育の世代間伝達や、父親となる過程における心理を扱った研究は極めて少ない。

そこで本研究では、これまで取り上げられる事なかった父親の養育態度に焦点を当て、世代間伝達という観点から事例研究を行うことを目的としている。なお本研究で扱う世代間伝達は、DV や虐待などの家族病理的な問題ではなく、健康的な父子関係において起こりうる養育の伝達を意味する。

面接調査は 8 名に行い、本論文ではそのうち以下 2 名の事例に関して、父親の養育態度の世代間伝達について検討した。

A（45 歳・自営業）の事例・・・「ママごとのような子育て」

B（48 歳・会社員）の事例・・・「子育ては第 2 の名刺」

調査内容は、自分が父親から受けた養育に関する質問（8 項目）と、自分から子どもへの養育に関する質問（18 項目）で、それぞれのエピソードと、その出来事に対する感情を聞いた。

事例 A は幼い頃に父親との関係がほとんどなく、理想の父親像が形成されずに父親になり、どのような父親でいることが子どもにとって良いのか分からないまま、実感のない、まるで「ママごと」のような子育てをしていると語っている。A は、子どもの気持ち「わからない」と答えることが多く、また自分が傷つきたくないために、敢えて分かるうとしない部分もある。かつての家庭で感じてきた不安が、自分の家庭においても再現されている。

事例 B は子どもの成長に合わせて自分の関わり方を柔軟に変え、父親としての発達（一緒に遊んだ時期、楽しませてもらった時期、経済的援助しかできない空白の時期）がよく現れており、子育ては、男性として人間として成長し、一人前になるための手段の一つとして存在すると考えている。彼にとっては、子育ては「名刺」であり、「子どもがいる」という事実だけが必要であって、養育行動には反映されない。男は育児はしないものだという父から受け継いだ考えや、また過去に父親から暴力的なしつけを受けたことを思い出し、自分は暴力的な父親にはなりたくないという思いから「男は外で仕事、女は家庭で家事育児」という言葉を口にして、養育行動から回避する傾向がみられる。

どちらの事例も、自分の父親との楽しい思い出が 1 つ 2 つ語られ、その楽しかった思い出は、本人が意識しているか否かに関わらず、自分が父親になってからの子どもとの楽しいエピソードの形成に関係しており、良い意味での世代間伝達だと考えられる。

確かに、父親の養育行動やその感情には、過去に父親から受けた養育や父親との思い出が少なからず影響しているようだが、自分の父親のようになりたくなければ、本事例のように「育児は母親の役目」として妻任せにしたり、仕事を理由に育児にかかわる時間がないとするなど、養育を回避する男性も少なくない。こうした点は女性の場合とは異なるのではないだろうか。

今回本研究では、2 つの事例をもとに、父親の態度とその時の感情という点から、世代間伝達を考察したが、さらに、時代的・社会的背景に伴って変化する父親の育児と世代間伝達との関連を考察することや、男性の社会的・心理的発達段階と父親の発達段階との関連を今後の課題として研究し、また、父親になる男性や育児に悩む父親に対して、本研究で得られた父親の感情や葛藤を参考にして子育て支援をしていきたいと思う。